

## 大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進（13）



～ 子どもの話に耳を傾けよう ～

石垣市教育委員会 学校教育課長 前三盛 敦

『今日、少しあなたの子どもの言おうとしていることに耳を傾けよう。今日、聞いてあげよう、あなたがどんなに忙しくても。さもないと、いつか子どもはあなたの話を聞かなくなる。子どもの悩みや要求を聞いてあげよう。どんな些細な勝利の話も、どんなにささやかな行いもほめておしゃべりを我慢して聞き、いっしょに大笑いしてあげよう。子どもに何があったのか、何を求めているのか見つけてあげよう。そして言ってあげよう、愛していると。毎晩…。毎晩…。叱ったあとは必ず抱きしめてやり、「大丈夫だ」と言ってやろう。子どもの悪い点ばかりあげつらっていると、そうやってほしくないような人間になってしまう。だが、同じ家族の一員なのが誇らしいと言ってやれば、子どもは、自分を成功者だと思って育つ。』これは、アメリカの人間行動博士デニス・ウェイトリーの「子どもの話に耳を傾けよう」という詩です。

「あなたは、子どもの話をじっくりと聴いていますか」と聞かれると、たいていの方は、「子どもと毎日顔を合わせていろいろ話をしているので、だいたいはできているかな」と思うかも知れませんが、実際は、親からの話題や生活の注意であったりして、案外、子どもの話をじっくり聴くという機会は少ないのではないのでしょうか。

私がこの詩に初めて出会ったのは、元新川小学校校長の漢那憲吉先生の学校経営方針を綴った冊子の最初のページでした。当時、私は教頭として漢那校長と共に学校経営を担いましたが、漢那校長がたくさんある経営方針の中で最も大切にし職員に一番伝えたかったのが、この「子どもの話に耳を傾けよう」でした。当時、子どもが大好きで教師のはしくれでもある私は、子どもの話を聞くことは苦にもなりませんし、喜びの方が大きかったので、自分自身は実践できていると思っていました。しかし、それは、漢那校長の子どもと関わる姿勢を観て、改めざるを得ませんでした。

新川小学校の校長室は、子どもたちが体育館や保健室に向かう移動の際のメイン通りに面しています。漢那校長は、校長室の窓をいつもオープンにし、そこに訪れる子どもたちとのコミュニケーションをととても大切にしていました。手を振って通り過ぎる子、握手やタッチを求める子、教室であったことや家での出来事、週末の大会の結果を報告する子、恥ずかしくてただ友達に付いて来る子、友達や先生のグチをこぼしに来る子等、基本的にはそのほとんどがたわいのない子どもらしい話です。漢那校長はとても忙しい時でさえ、仕事の手を止め「どうしたの、そうなんだ」と子どもの話を必ず聞いてから「また後でね」と対応していました。温かい笑顔とユーモアあふれるダジャレや突っ込みもあって、校長室の窓に顔を出す子は後を絶ちませんでした。

子どもたちの移動の際の漢那校長とのやりとりは、家庭と学校、授業と授業の切り替えの

クッションのようなものだったと思います。子どもの話に耳を傾け、受容し共感することで、子どもたちは心をリフレッシュし、次の活動の意欲を高めているようでした。また、漢那校長に承認してもらうことで、自己存在を確認しているようでもありました。

子どもは、なかなか自分の悩みや家庭のことなどを先生や大人に話すことはありませんが、よく話を聞いてくれる人には、少しずつ心を開いていくようです。そんな漢那校長でしたから、子ども一人一人の対応について先生方に、子どもに寄り添った助言をしていました。漢那校長の傾聴の姿勢は、職員にもしっかり伝わり、子どもたちが安心して過ごせる学校経営ができたのではないかと考えています。

さて、この詩は、子どもの話を「今日」聞いてあげよう、どんな話でも聞いてあげようというメッセージから始まっていますが、私はここが一番大切なことだと思っています。誰でも自分に時間がありゆとりのあるときは、子どもや相手の話に耳を傾けることができます。しかし、仕事や家事等をしているときに話かけられたらどうでしょう。「今忙しいからあとでね。」と対応してしまいます。それだけならまだしも、「うるさい」とか「あっち行って」等言うてしまうことさえあるのではないのでしょうか。子どもは決して、長く話を聴いてと言っているわけではありません。きっと、その瞬間、瞬間に、自分を受け止め、「あなたのこといつも見ているよ」「思っているよ」という存在承認が欲しいのだと思います。受け止め共感してもらえたら、自分のやりたい活動に向かうと思います。「子どもの話に耳を傾ける」ことは、簡単そうで実は難しく、私は、子どもの話をじっくり聴いているつもりだったので

す。

子どもの話を聴くことは、勇気づけのコミュニケーションの中ではとても重要なことです。子どもは、私たちが考えている以上に、「お母さんやお父さんに話したい」と思っています。「後にして」と言うと、タイミングを逃した子どもは話すことをあきらめてしまいます。忙しい時は、「今忙しいから少しの時間だけでいい」と時間を区切って聴いて下さい。

ちょっと話を聞いてもらえることで、子どもの心はとても落ち着きます。聴くときに大切なことは、子どもの立場になって、ただ聴くことです。一生懸命聴くことが、「自分を大切にしてくれている」という気持ちにつながり、勇気づけになるのです。

保護者の皆さん、子どもが学校から帰ってきた時、夕食の時、車の中やお風呂の中、どんな場面でも結構ですので、我が子の話にどうか耳を傾けていきましょう。